

氏名	有 木 恭 子		
授与した学位	博 士		
専攻分野の名称	文 学		
学位授与番号	博甲第2028号		
学位授与の日付	平成12年 3月25日		
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)		
学位論文題目	The Main Thematic Current in John Steinbeck's Works: A Positive View of Man's Survival (スタインベックの作品におけるテーマの主流 —人間生存への肯定的視点—)		
論文審査委員	教授 西前 孝	教授 榎木 榮一	
	教授 本池 立	助教授 久保田 聡	
	関西大学文学部教授 中山 喜代市		

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

スタインベックはこれまでのところ、その創作活動における題材と技法の多様性もつぱら研究者たちによって注目され、評価されてきた。事実、最初の小説 *Cup of Gold* (1929)から最後のエッセイ *America and Americans*(1966)まで、彼は様々な素材に取り組み、常に新しい形式に挑戦し、実験的な手法を試みてきた作家である。しかし、一見このような変化に富む作品群をテーマという視点からとらえ、ると、少なくとも四つの主要なテーマが認められ、しかもそれらはすべて関連しあい、究極的には一つの大きなテーマの主流を形成していることがわかる。それは、人間が生存してゆくために備えた能力に強い信頼を置くスタインベックの人間観に根ざしている。このような強い信念に支えられて創造した作品群の本質に迫ろうとすれば、それらの作品を貫くテーマを視野に入れた研究は欠かせない。しかし、20世紀後半にいたっても、主題的アプローチに裏打ちされた技法と構造研究はほとんど取り組まれていないのが実状である。筆者の目的は、スタインベック文学における主要なテーマを明らかにするとともに、個々の作品においてそれらのおおののテーマがいかにか美的に、かつどのような技法を駆使して提示されているかを論じ、さらに一つのテーマが別のテーマと有機的に結びつくことによつていかなる効果が生まれているのかを検証してゆくことにある。

この観点からスタインベック文学を見ると、次ぎの四つのテーマがドミナントなものとして浮かび上がってくる。(1)人間と土地との緊密な関係の支持、(2)常に向上を目指そうとする人間精神の肯定、(3)人間の存在に不可欠な要素—愛と自由意志—の必要性、(4)人間の能力と不屈の精神への信頼、である。第1章では土地が人間の存在にとっていかに重要な意味をもって描かれているかを、1929年終わりから1930年代にかけてのスタインベックの活動を踏まえながら *The Grapes of Wrath* と1949年に書かれた *Viva Zapata* (1975年出版)を中心に論じている。さらに *The Grapes of Wrath* を同時代の極めて類似した農民の悲劇を描いたアースキン・コールドウェルの *Tobacco Road* と比較考察

しながら、スタインベックによるテーマへのアプローチの特質を分析する。

大地はスタインベックにとってアレゴリカルなレベルにおいても重要な意味をもっている。生命を生み出し、育むという大地の使命を女性もまた担うものと彼はとらえ、しばしば母なる大地のイメージで女性を描いている。第2章では母である女性登場人物が作品の主軸としてどのように機能しているかを *To a God Unknown*, *The Grapes of Wrath*, *Burning Bright* を中心に論じるとともに、一方で子供をもたない既婚女性が土地との関わりにおいてどのように描写されているのかを、技法に注意を払いながら "The Chrysanthemums" と "The White Quail" を中心に論述していく。

第3章では、よりよく生きていきたいと願う人間の欲求を肯定するスタインベックが、いわゆる「目的論」「非目的論」という二つの対立概念をどのようにとらえ、作品のなかにどのように取り入れ、扱っているのかを *The Forgotten Village*, *Tortilla Flat*, *Cannery Row*, *The Pearl* そして *The Wayward Bus* のなかに探っている。またこの章ではスタインベックの作家活動に大きな影響を与えたと考えられている、友人であり海洋生物学者であったエドワード・リケッツとの関係に光りを当てながら、人間の進歩を支持する「目的論」的思考と、因果関係を否定しあるがままの現実を肯定する「非目的論」的思考がテーマとして、また技法として、どのように機能しているかをテキスト分析を通して考察する。

スタインベックは人間の存在を支えるものとして愛(ここでいう「愛」は人間の健全な成長、存在に欠かせない愛情のことであり、また、憎しみに対立するよりもむしろ孤独に対立する概念として把握されている)と自由意志の力を重視し、これらをテーマとして繰り返し作品の中で使用している。本論文の第4章はこのような見地からの論述にあてられる。これまでこのような視点からはほとんど研究されることのなかった *Of Mice and Men* を「愛」と「孤独」という座標軸によって解釈を試みる。次に *East of Eden* 論においては、トラスク家とハミルトン家とキャシーの三つの物語が交差するところに、この作品のテーマがいわば「愛」という座標軸上に浮かび上がるということ、これまでの研究とはまったく異なった見地から証明を試みる。*In Dubious Battle* と *The Moon Is Down* 論においては、愛と自由意志が人間性を鍛え強化する武器として効果的に機能していることを、構造と技法の両側面から論じている。

よりよい未来を願って人類が生み出してきた文明が、逆に人間の存在を脅かしている事実を目撃した作家がこの現実をどのように受け止めたか、という視点から第5章は展開している。1950年代の終わり、物質文明によるアメリカ人の精神風土の荒廃をまのあたりにし、危機感を強めたスタインベックは *The Winter of Our Discontent* を著し、アメリカの未来に一条の光を託しながら小説を終えている。しかし、そのすぐ後に出版された *The Travels with Charlie in Search of America* は、読み方によっては彼の思考が内包していた矛盾が露呈した作品としても読むことができる。つまり、人間への無限ともいえる彼の信頼が機械文明のもたらすひずみによって揺らぎ始めたという認識である。彼の四つのテーマ群が示すように、スタインベックはフランクリン、エマソン、ホイットマンから脈々と流れ続ける「アメリカの夢」の継承者であったといえる。彼の最後の著書 *America and Americans* においてもそれは明確に現れており、アメリカ人の良心の再生を信じてやまない筆者の声を聞くことができる。スタインベック文学をその全体像においてとらえようとする試みには、ドミナントなテーマの発見とその位置付けというこのこれまでほとんど開拓されていないアプローチが不可避的に要請される。

## 学位論文審査結果の要旨

有木恭子氏の学位請求論文に関する学位審査会は平成12年1月26日、学内からの委員4名と他に招聘教授1名の計5名によって行われた。申請者自身による論文の概要説明、委員全員による質疑応答、その後の審査委員の間での討議、というプロセスで進化した。

本論文は、アメリカの20世紀の小説家であり特に1930年代を中心に主要な作品を発表したジョン・スタインベックの文学について、彼の全体像を視野に収めて論究したものである。人間と土地との関係を根源的に問い直すことから説き起こして、自然的・社会的苦境にあってなお希望を失わず、愛と自由意志を支えに前進しようとする人間の姿を浮き彫りにし、物理的・生理的次元のみならず心理的・象徴的次元においても光を当てた考察は、多くの新しい知見を含むものとして評価された。

1930年代、オクラホマとその周辺において、社会的苦境にあった農民たちに追い討ちをかけるように、再三、砂嵐(ダスト・ボウル)が襲いかかった。小説家スタインベックにおいて、これは一過性の歴史的事実であることにとどまるものではなく、人間存在の根源に関わる問題であった。

論文は大地と人間とのこの根源的な関係を『怒りのぶどう』などの作品の中で問い直すことから検討が始められている。物理的レベルの追究は象徴的レベルでの検討へと発展する中で、特に女性の役割の問題として展開を見ているが、フェミニズムの問題意識へも目配りしながら、緻密な作品分析を展開している。苦境を生き抜く人間を描く作家の中に、論者は、人間性への究極的な信頼を見ている。それは一方で集団としての人間の進むべき方向性の問題として検討され、他方で内的存在としての人間の問題すなわち内的エネルギーとしての愛と自由意志の問題として検討されている。

こうして論文は、スタインベックにおける人間生存の問題を自然性、象徴性、内面性の座標軸において位置付ける試みを展開している。そしてこの試みは十分に成功していることが評価された。

特筆すべきは、この射程の中で作家のほとんど全ての長編と中編作品(一部短編をも含めて)が再構成されている点である。部分的な考察としては先行研究も幾らかはあるが、作家の主要作品のほとんどすべてを俎上に乗せてなされたこのアプローチは、Lester J. Marksを超える、未だ類をみないものである。この意味で本論文は、日本人の手になる、しかも英語で書かれた初めての研究成果として高く評価されるものである。使用言語である英語そのものもきわめて読み易く達意の英文であり、しかも学術論文にふさわしい文体上の品位を維持していて、好感の持てるものとなっている。

難点も勿論幾らか指摘された。スペリングやタイプのエラー、表現上多用されすぎる繰り返し、導入部では論者自身の方法論への説明の不足感、また、結論部ではアメリカとアメリカ人の将来に向けての作家の希望を巡る問題についての言及不足、などである。しかしこれらはいずれも、本論文の持つ研究上の価値を損なうものではもとよりないものであることが、審査の席上確認された。

以上により、審査委員会は、有木恭子氏の本論文を博士の学位論文として認定することに關して全員一致で合意した。